

甲虫 No. 58  
ニュース

COLEOPTERISTS'  
NEWS

October, 1982

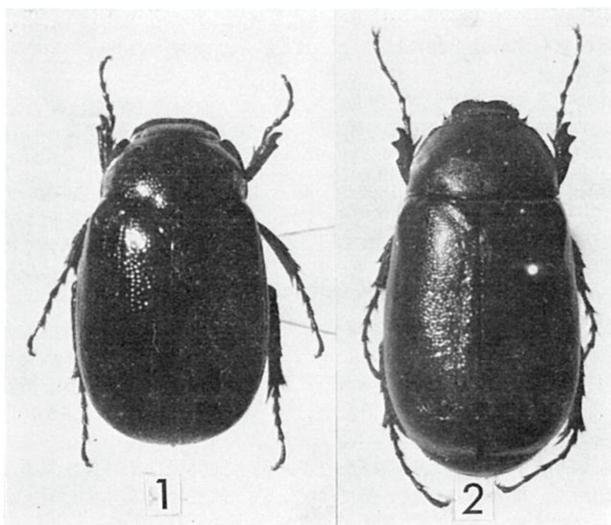
日本産コフキコガネ族概説(1)

小林 裕和

はじめに 食葉性コガネムシの中にあつて、コフキコガネ亜科 (Melolonthinae) は、スジコガネ亜科 (Rutelinae) やハナムグリ亜科 (Cetoniinae) などと共に、種類数の多い大きなグループの1つである。我国では、コフキコガネ亜科は、アシナゴコガネ族 (Hoplini)、ピロウドコガネ族 (Sericini) と、コフキコガネ族 (Melolonthini) の3族に区別されている。汎世界的な分布を持ち、非常に種類数の豊富なピロウドコガネ族と同様、コフキコガネ族も数多くの種類が、東南アジア、アフリカ、北アメリカなどを中心に記載されている。我国におけるこの族に含まれる種類は、ヒゲコガネ、シロスジコガネ、コフキコガネなどを含む、いわゆるコフキコガネのグループと、カンショコガネ、ナガチャコガネ、クロコガネなどを含む、いわゆるクロコガネのグループとに大別することができる。コフキコガネ亜科の中では、ピロウドコガネ族については国内では、沢田、野村等によってよく研究され、特に近年、野村(1972, 1973, 1976)によってまとまった論文が出されており、種の検索ならびに検討が容易にできるようになった。一方、コフキコガネ族については、属程度の検討はされているものの、全体としてまとまった論文は、残念ながら見る事ができない。そこで、現在までに断片的に出された報文をまとめ、再検討を加えてここに解説することにした。

日本産種の研究史 日本から初めてこのグループを記録したのは、BURMEISTER (1855, *Handb. d. Ent.*, 4, p. 420) で、この時にはコフキコガネ (*M. japonica*) が他の多くの種類に混じって唯一種我国から記載されている。その後 MOTSCHULSKY (1857, 1861) が2属2種を、WATERHOUSE (1875) が4属4種、さらに、G. LEWIS (1887, 1895, 1896) が3属5種を記載している。この間、琉球列島からは BRENSKE (1890) が、奄美大島からオキナワシロスジコガネ (*P. schoenfeldti*) を最初に記載している。

今世紀に入って MOESER (1912) が1属1種、ARROW (1913) が2属2種を記載して以降、外国人による我国における新種の記載は見られず、本族の研究は新島・木下 (1923, 1927)、沢田 (1940, 1950)、中根 (1956, 1963)、野村 (1952, 1959, 1964, 1965, 1970, 1977) 等の日本人の研究者の手で進められ、現在までに亜種を含め49種が記録されている。この中で、1895年 G. LEWIS が長崎県五島列島から記載した、オオチャイロコガネ (*H. nipponensis*) と「日本」



1. *Apogonia major* WATERHOUSE オオカンショコガネ  
2. *Miridiba castanea* (WATERHOUSE) クリイロコガネ

から記載したニッポンカンショコガネ (*A. nipponica*) の両種は、前種が朝鮮、東シベリア、中国に、後者が台湾にそれぞれ分布することが確認されているものの、*nippon* の名前が付けられた両種が、原記載以降肝心の我国において採集例が見当たらないことは、何とも皮肉な話である。

亜族の検索表

- 1. 後胸後側板は狭く、長さは幅の3倍以上。体表面は毛がないかまたは軟毛を有し、稀に鱗片でおおわれる……クロコガネ亜族 (*Rhyzotrogina*)
- 1'. 後胸後側板は幅広く、長さは幅の3倍以下。体表面は鱗毛または毛で覆われるが時として鱗片でおおわれる……コフキコガネ亜族 (*Melolonthina*)  
 亜族(場合によっては族)の扱い方については時代、著者によって諸説があり、明確な結論がない部分が多く、今後の検討課題の1つとなっているが、ここでは、亜族や属の位置づけについては野村 (1977) 野村・小林 (1979) の扱いに従うこととした。

Subtribe *Rhyzotrogina* クロコガネ亜族  
 日本産属の検索表

- 1. 前胸背前縁は膜状となる。前基節は円錐状。爪は先端で切り込みを有する。腹節は融合するが、明らかな縫合線を有する…… I. カンショコガネ属 *Apogonia*
- 1'. 前胸背前縁はキチン化する。前基節は横長、腹節は融合し、縫合線は細いかあるいは中央で消失する…… 2.
- 2. 爪は内側に直立した歯を具える。稀に雄では先端に切れ込みを有する…… 3.
- 2'. 爪は先端に切れ込みを有する。この場合、腹側の歯は背側の歯よりも頑強…… 5.
- 3. 頭頂には強い横の隆起を有する。上翅には会合部の縦隆を除いて、縦隆を欠く…… II. クリイロコガネ属 *Miridiba*
- 3'. 頭頂には隆起がないが、時として横の凸部を有する…… 4.
- 4. 爪は雄雌とも、内側に直立した歯を具える…… III. クロコガネ属 *Holotrichia*
- 4'. 爪は雄では先端に切れ込みを有するが、雌では内側に垂直な歯を具える…… IV. オオキイロコガネ属 *Pollaplonyx*
- 5. 後胸板は白っぽく艶消しで、ほとんどの場合毛がないが、時として短毛を生じる…… 6.
- 5'. 後胸板は光沢があり、長い毛を密に装う…… 7.
- 6. 触角は10節で、雄雌とも葉片部は3節…… V. ヒメクロコガネ属 *Sophrops*
- 6'. 触角は9節ないし10節で、雄の葉片部は6節で柄部の長さの2倍以上。雌では、4または5節で柄部より短い…… VI. ヒゲナガクロコガネ属 *Hexataenius*
- 7. 触角葉片部は雄雌とも3節…… 8.
- 7'. 触角葉片部は、雄では7節で柄部のほぼ2倍、雌では5節で短い…… VII. ナガチャコガネ属 *Heptophylla*
- 8. 触角は雄雌とも10節…… VIII. アカチャコガネ属 *Brahmina*
- 8'. 触角は雄雌とも9節……

…… K. チョウセンキコガネ属 *Metabolus*

I. Genus *Apogonia* KIRBY, 1818 カンショコガネ属

この属は、東洋熱帯地方を中心として日本、中国、インド、ヒマラヤなどを含む地域、およびアフリカの中南部地域に分布しており、現在までに世界で約250種ほどが知られている。我国では、九州、沖縄地方を中心に4亜種を含め13種が分布している。しかし、北海道からはまだ本属の分布記録はなく、本州においてさえヒメカンショコガネ (*A. amida*) ただ1種が分布しているにすぎない。

日本産種の検索表

- 1. 前胸背は前縁角の後方でえぐられる。頭楯は比較的幅広く、前縁はほぼ直線状または湾入する…… 2.
- 1'. 前胸背は前縁角の後方でえぐられない。頭楯はあまり幅広くなく、前縁はほぼ直線状またはなだらかに円い…… 5.
- 2. 前胸背の側縁は、一様に弧状に曲る。点刻はややまばらで、しわ状とならない。中央には通常1対のかすかな凹圧部を有する。体長11~12 mm  
 …… *major* WATERHOUSE
- 2'. 前胸背の側縁は、中央より後方でゆるく曲る…… 3.
- 3. 前胸背の点刻は、一部を除いてしわ状とならない…… 4.
- 3'. 前胸背の点刻は、縦しわ状となり、光沢をほとんど欠く…… *ishiharai* SAWADA
  - a. 前胸背の点刻は非常に強く、密である。体長10.5~11.5mm…… subsp. *ishiharai* SAWADA
  - b. 前胸背の点刻はやや浅く細かい。体長10.5~11mm…… subsp. *yakus himana* NOMURA
- 4. 体色は茶褐色で光沢が強い。前胸背の点刻は比較的密であるが、小さく浅い。後縁角の前方に明瞭な平圧部を有する個体が多い。体長9~10mm  
 …… *shibuyai* SAWADA
- 4'. 体色は黒色~黒褐色で光沢がある。時として背面は赤味を帯びる。前胸背の点刻は一部で融合した点刻を密に具える。後縁角の前方はえぐられないが、時としてかすかに凹む。体長8~10mm  
 …… *bicavata* ARROW
- 5. 前脛節は2外歯を具える…… 6.
- 5'. 前脛節は3外歯を具えるが、時として第3歯は小さく目立たない…… 7.
- 6. 小楯板は大きく、ほとんど点刻されない。体長7~8.5mm…… *amida* LEWIS
- 6'. 小楯板は小さな点刻をまばらに具える。体長6~7mm…… *niponica* LEWIS
- 7. 前胸背の点刻は、比較的大きいが密でない (*A. b. bicarinata* ではやや小さい)…… 8.
- 7'. 前胸背の点刻は、小さく密である。前脛節には雄雌とも明瞭な3外歯を具える。体長9~11mm  
 …… *kamiyai* SAWADA

8. 前尾節板及び尾節板には縦隆線がない。第1～第2腹節の両側には不明瞭な縦稜が認められる。体長9.5～11.5mm ..... *cupreoviridis* KOLBE

8'. 前尾節板及び尾節板の中央には縦隆線がある。第1～3腹節の両側には明瞭な縦稜がある。

..... *bicarinata* LEWIS

a. 前胸背の点刻はやや小さく、密でない。

上翅の点刻も、他の亜種と比べ小さい。体長8.5～11mm..... *subsp. bicarinata* LEWIS

b. 前尾節板および尾節板にある縦隆線は、最も明瞭である。体長9～10mm .....

..... *subsp. okinawana* NOMURA

c. 前胸背の中央には縦に点刻を欠く滑らかな部分を有する。体長9～11mm .....

..... *subsp. yaeyamana* NOMURA

1. *Apogonia major* WATERHOUSE, 1875 オオカンショコガネ

体色は黒色でかなり強い光沢がある。個体によっては、背面にわずかな金属緑色光沢を帯びるものがある。前脛節は2外歯を具える。分布：日本(九州)。

本種は WATERHOUSE によって1875年 (*Trans. ent. Soc. London*, 1875) 長崎を模式産地として記載されている。九州本土以外では、長崎県老岐島で7月中旬頃に多数の個体が得られているが、他の地域ではあまり個体数は多くないようである。

2. *Apogonia ishiharai* SAWADA, 1940 イシハラカンショコガネ

我国に産するカンショコガネ属の中で前胸背が強く縦しわ状になるものは本種だけであるので他の種類との区別は容易である。原名亜種は高知県足摺岬を模式産地とし、四国からのみ知られている。また、屋久島およびトカラ列島中之島、悪石島には別亜種 *subsp. yakushimana* NOMURA, 1959 (ヤクシマカンショコガネ) が分布している。

3. *Apogonia shibuyai* SAWADA, 1950 シブヤカンショコガネ

体色は茶褐色で光沢が強く。頭部および前胸背では一部暗色となる。1940年渋谷武士氏によって奄美大島名瀬で採集された1頭の雌によって記載された。分布：琉球列島(奄美大島)

4. *Apogonia bicavata* ARROW, 1913 リュウキョウカンショコガネ

沖縄本島において J. E. A. LEWIS の採集した標本に基づいて記載された。

分布：琉球列島(中之島、沖縄本島)

本種は前述の *major*, *ishiharai* および *shibuyai* と外部形態が似かよっており、雄交尾器の形状もよく似ている。しかも、現在までに知られている分布域はいずれも重複することがない点から考えて、起源を同じくする種がそれぞれの地域において特殊化していったものではなからうかと考えられる。もし、そうでなかったにしてもこの4種は非常に類縁の近い種類であることは間違いない。

5. *Apogonia amida* LEWIS, 1896 ヒメカンショ

コガネ

現在のところ本属に含まれる種類のうち、本州に分布するのは本種ただ1種である。低地～低山地帯に産することが多く、その出現期も春から初冬にかけての長期間に亘る。また、冬季や初春には土中より成虫を見出すことがある。

分布：日本(本州、四国、九州)、台湾、中国。

6. *Apogonia niponica* LEWIS, 1895 ニッポンカンショコガネ

本種は LEWIS によって記載されたが、その産地はただ単に Japan となっているだけで詳しい採集地は判らない。LEWIS は何種類ものコガネムシを日本から記録・記載しているが、大部分のものは明確な産地が記されており、この種のように漠然とした形で産地を示すようなことはほとんど例がない。しかも、原記載以降全く国内では採集された記録がないことなどから考えても、本種が本当に我国に分布するかどうかについては疑問が多い。

分布：日本(?), 台湾

7. *Apogonia kamiyai* SAWADA, 1940 カミヤカンショコガネ

本種は、1927年に神谷一男氏が台湾の四重溪で採集した2頭の雌を基に記載されたが、我国でも先島諸島に分布することが確認されている。

分布：琉球列島(宮古島、石垣島、与那国島)、台湾。

8. *Apogonia cupreoviridis* KOLBE, 1886 チョウセンカンショコガネ

原名亜種は、朝鮮(釜山)を模式産地として記載された。その後、LEWIS が1896年に長崎県五島列島から本種を記録しているが、以来採集の報告はなく、前述の *A. niponica* 同様に日本の分布には疑問がある。また、宮古島には別亜種 *subsp. miyakoana* NOMURA, 1965 (ミヤコカンショコガネ) が分布している。本亜種は最初、*A. bicarinata* の一亜種として記載されたものであるが、1973年野村は *A. cupreoviridis* の亜種とした。なお、済州島には別亜種、*subsp. fusania* KOLBE が知られている。

9. *Apogonia bicarinata* LEWIS, 1896 フタスジカンショコガネ

九州南部から琉球列島のほぼ全域に亘る広い地域に分布しており、琉球列島では最も個体数の多い種類である。原名亜種は、奄美大島を模式産地とするが、日本では以下の3亜種に区別される。

*subsp. bicarinata* LEWIS, 1896, s. str.

分布：日本(九州、黒島)、琉球列島(中之島、宝島、悪石島、奄美大島、徳之島、沖永良部島)。

*subsp. okinawana* NOMURA, 1964 オキナワカンショコガネ

分布：琉球列島(沖縄本島)

*subsp. yaeyamana* NOMURA, 1965 ヤエヤマカンショコガネ

分布：琉球列島(石垣島、西表島)

上記の3亜種のほかに、台湾には別亜種の *A. b.*

*sauteri* MOSER, 1918 を産する。

II. Genus *Miridiba* REITTER, 1902 クリイロコガネ属

触角は9節で、葉片部は雄雌とも3節よりなる。後述の *Holotrichia* 属と非常に近縁のグループであるが、頭頂に強い横隆起を具えることがこの属の大きな特徴となっている。現在までに東南アジア地域を中心として約15種が知られているが、我国には次の1種だけが分布している。

1. *Miridiba castanea* (WATERHOUSE, 1875) クリイロコガネ

体長18~22mm。茶褐色~褐色で光沢がある。頭楯は密に点刻され、前縁は中央でえぐられる。前胸背の点刻は小さく密である。上翅は平坦で縦隆がなく、点刻はやや大きく、粗い。雄の尾節の基部には横隆起を有する。

分布：日本(本州, 四国, 九州), 朝鮮, 濟州島,

アムール, 中国。

本種は最初 *Holotrichia castanea* として記載された。その後、1948年に ARROW が *Neodontcnema* 属を創設した際に、本種を含め9種類がこの属に移されているので、本種には最近までこの属名が使用されてきた。また、FREY が1971年にインド, シッキム, アッサム等のこのグループをまとめた際にも *Neodontcnema* 属が使用されている。しかし、ネパール, 東南アジア, 中国, 台湾などに産する *Neodontcnema* 属に含められていた種は、中国の上海を模式産地として記載された *Rhizotrogus trichophorus* FAIRMAIRE, 1891を模式種として REITTER が1902年に創設した *Miridiba* 属の特徴と一致する。このことから、本種を含め *Neodontcnema* 属として取り扱われてきた種は、*Miridiba* 属に変えられるべきであると考えられる。

### 日本産ハンミョウ類の分布3題

黒 沢 良 彦

ハンミョウ類の様な人目を惹く顕著な甲虫類の日本における分布はかなり詳しく判っているとはばかり思っていたが、私の手許に従来の分布上の常識を覆す様な二つの記録がある。その一つは、かなり以前から手許に標本がありながら、余りに従来の常識から外れているためにその発表を躊躇していた、四国のミヤマハンミョウの記録であり、他の一つは遠山雅夫氏より頂いた北海道渡島半島のマガタマハンミョウの記録である。そこで、以下にその詳細を記録すると共に併せて以前から考えていたハンミョウ類の分布境界線について私の意見を述べてみたい。

1. 四国剣山のミヤマハンミョウ (Fig.1)

ミヤマハンミョウ *Cicindela sachalinensis* MORAWITZ の本州亜種 *niohozana* BATES の分布西限は、南アルプス, 中央アルプス, 北アルプスを結ぶ線で、それ以西では加賀白山(石川県)に産するのを除けば他の記録は全くない。

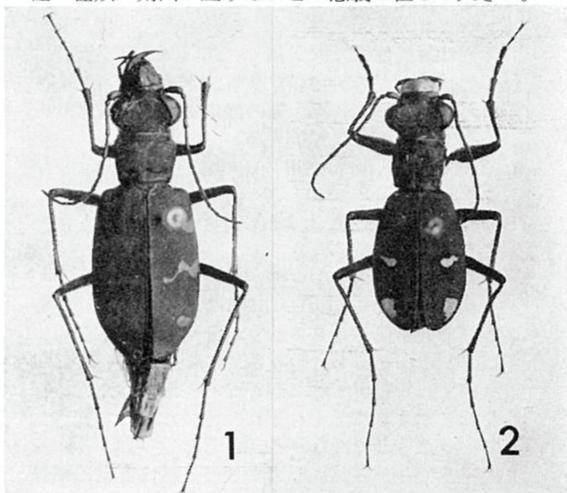
国立科学博物館には、1957年6月4日に上野俊一博士が徳島県三好郡東祖谷山村名頃から剣山の見ノ越に至る間で採集されたアイヌハンミョウ *C. gemma'aina* LEWIS 2♂♂, 4♀♀, ニワハンミョウ *C. japana* MOTSCHULSKY 1♂, ハンミョウ *C. chinensis japonica* THUNBERG 1♀などに混って、ミヤマハンミョウ1♀がある。この標本の存在は長い間私を悩ませて来たもので、上野博士の採集品であるので間違いはないとは考えられるものの、古い採集でもあり、当時の常識ではミヤマハンミョウが四国に産するなどとは到底考えられなかったので、次の標本の採れるまでと考えて記録するのを保留して来た。しかし、正式な記録ではないが、今回徳島県農業経済課の吉田正隆氏が1982年2月25日付の朝日新聞徳島版に本種が剣山に産することを記しておられ

るのを見て、剣山にミヤマハンミョウを産するのはやはり確実であると思われるので、国立科学博物館に所蔵されている標本を正式に記録することにした。

1♀, 徳島県三好郡東祖谷山村名頃~剣山見ノ越, 4. vi. 1957, 上野俊一採集。

ただ1頭を検しただけであるが、本州産との差異は見られない。上野博士を通して伺った話によると、吉田氏は剣山の両剣谷で本種2頭を1978年8月12日に採集しておられるとのことである。

本種の分布は中部地方まででそれから西には及んでいなかったが、今回の記録で一挙に紀伊半島を跳び越して四国に及んだことになる。本種のような寒地性の種類が剣山に産することの意義は極めて大きい。



1. *Cicindela sachalinensis* MORAWITZ ミヤマハンミョウ 2. *C. ovipennis* BATES マガタマハンミョウ

## 2. 北海道駒ヶ岳のマガタマハンミョウ (Fig. 2)

マガタマハンミョウ *Cicindela ovipennis* BATES  
の既知分布域は青森県から石川県の能登半島に至る主として裏日本地域と佐渡島に限られ、表日本にはほとんど産地がない。裏日本でもどこにでも産するわけではなく、A山には産するのにその隣りのB山には全く見当たらないと言った有様で、極めて局地的な分布を示すことが多い。後翅が退化して飛ぶことができなく、ただ速かに歩行するだけであるので、海を越して佐渡島に多産するのは注目に値する。同様に以下に記す北海道からの本種の記録も、従来の常識を破った極めて注目すべき記録と言える。

1♂, 北海道渡島支庁芽部郡砂川町駒ヶ岳, 7. viii. 1969, 島田正信採集, 国立科学博物館所蔵。

写真に示した通り、この標本の翅端紋はかなり拡大しているが、個体変異の中の極端なもので、地方的な変化ではないであろう。

## 3. 尾池線批判

尾池一清氏は1940年に、日本におけるハンミョウ類の分布を調べた結果、本州中部の糸魚川—静岡線 (Fossa magna) に沿って分布境界線が引けると結論した (関西昆虫学会会報, 10(1), p. 18)。野村健一博士もこの分布境界線の有意義であることを認め、尾池線と命名した。尾池氏がこの分布境界線を提唱するに当り、その根拠としたのは、「それ以北に発見されるもので、以南に発見されないもの」がマガタマハンミョウ (新潟, 立山), 「以南に発見されるもので、以北に発見されないもの」がハラビロハンミョウ *C. sumatrensis* HERBST (新潟), イカリモンハンミョウ *C. anchoralis punctatissima* HORN (石川), シロヘリハンミョウ *C. nivicincta* CHEVROLAT (静岡), およびトウキョウヒメハンミョウ *C. kalea yedoensis* KANO (横浜, 東京) の5種の分布である。( ) 内に挙げた地名は尾池氏が挙げた通りに記してあるが、これら5種とその次に挙げられている地名を見てみると、氏は果して糸魚川—静岡線が本州のどこを走っているのか正確にご存知であったのか否かはなはだ疑問に思えて来る。この線の以北に限り分布するはずのマガタマハンミョウの産地に「立山」が挙げられているかと思うと、

産地として「新潟」しか挙げられてないハラビロハンミョウがこの線の以南に限り産する種として挙げられていると言った有様で、氏は立山は糸魚川の北に、新潟は南にあると考えておられる様でもある。これだけだったらまだ感違いで済まされるかも知れないが、次のトウキョウヒメハンミョウに至っては全く弁明の余地はない。横浜と東京が静岡より南にある(ノ)など正に噴飯物である。当時尾池氏は満州におられたが、満州あたりから見れば東京、横浜、静岡などはどこにあらうとたいした差ではなかったかも知れないが、そうであつたら糸魚川—静岡線などは引き合いに持出す必要はなかったであろう。一体氏の頭の中にはどんな日本地図が画かれていたのであろうか。恐れ入ったものである。

また、シロヘリハンミョウは当時すでに湯浅啓温博士によって神奈川県三浦半島の三崎海岸に産することが記録されていたはずである。さらに、氏の示された分布地図を見ると、糸魚川—静岡ラインの「北側」に *C. sachalinensis*, 「南側」に *C. leuisci* と記されている。従って、この2種もこの線で分布が限られる種と考えておられるものと推定できる。しかし、氏のミヤマハンミョウの解説を見ると、「日本アルプス地方以北に棲息するが、以南の地には未発見である」と述べ、「日本アルプス地方」には産するのを確認したとある。「日本アルプス地方」とは北、中、南のどの日本アルプスを指すのか詳かではないが、これらのどれもが糸魚川—静岡線の西(南ノ)側にあり、北側にはない。従って、本種も「糸魚川—静岡ライン」を裏付ける示標種とはなり難い。ましてや今回報告した様に四国にも産するととなおさらである。

結局、尾池氏は糸魚川—静岡構造線(Fossa magna) と言う余りにも有名な地質構造線が存在するために、それで分布が限られる種類があるはずだと言う先入観にとらわれて、そのあたりで分布が限定される種類を拾い出して、無理矢理に地質構造線に結びつけてしまったものと推定されるが、その粗雑さには驚かされる。また、それをよく検討もせずそのまま尾池線と命名した野村博士も全くお粗末と言うより他はない。(国立科学博物館)

## ○神奈川県からメダケヒゲナガゾウムシの記録

神奈川県下に産するヒゲナガゾウムシ科甲虫に関しては、平野(1974)によって小田原箱根地方を中心とした地域から20種が記録され、さらに同氏(1981)によって「神奈川県下の甲虫」にそれまでに県下から記録された34種が収録された。最近筆者は、再三にわたって前波鉄也氏より、弘法山で採集されたヒゲナガゾウムシ類の御患受を受けた。その中に同県未記録の *Phloeobius stenus* JORDAN, 1923 メダケヒゲナガゾウムシ (新称) が含まれているので分布資料として報告する。なお下記のデータは全て弘法山で前波鉄也氏によって採集されたものである。

2頭, 16. v. 1982, ゴンズイの枯木よりピーティング法で採集; 1頭, 6. vi. 1982, ゴンズイの枯木より採集; 1頭, 6. vi. 1982, ガマズミの枯枝より採集; 1頭, 18. vii. 1982.

ちなみに本種はメダケを食害することが知られている(行徳, 1967及び小田, 1977)が、筆者も福岡県大牟田市において冬期に枯れたメダケ中より、ハイロヤハズカミキリ及びニホンホビロコメツキモドキと同時に本種を採集したことがある。

末筆ながら常々貴重な標本を提供して下さる前波鉄也氏に感謝申し上げる。(東京農大, 妹尾俊男)

台湾産 *Microserica* 属についての一知見

小林 裕 和

台湾産のピロウドコガネについては、1974年に野村 鎮氏によってまとめられた労作があり、属および種についての検索が割合容易にできるようになっている。しかしながら、一部の種類を除いて検視個体が比較的少数であるために、変異の多いグループについては、十分な検討がなされないまま種についての検索表が作られている。

台湾には、現在までに *inornata* NOMURA, *nitidipyga* NOMURA, *bisignata* NOMURA の3種類の *Microserica* 属のコガネムシが記録されている。筆者は近年、台湾産の本属に含まれる多数の個体について検討する機会を得た。その結果、このグループには今まで知られていなかったかなりの変異があることが判った。そこで、手許にある3種130頭余の個体について、変異があまり見られず同定の助けとなるいくつかの点について比較した結果を、ここに紹介しておきたいと思う。

〔雄〕

## 1) 触角片状部

- a. 柄部の約1.5倍の長さを持つ…… *inornata* NOMURA
- b. 柄部の約1.8倍の長さを持つ…… *nitidipyga* NOMURA
- c. 柄部の約2.3倍の長さを持つ…… *bisignata* NOMURA

(以下、a=*inornata*, b=*nitidipyga*, c=*bisignata* と略記することにする)

## 2) 後脛節端刺

- a. 第1跗節のほぼ $\frac{1}{2}$ の長さ。
- b. 第1跗節の $\frac{1}{2}$ より明らかに長い。
- c. 第1跗節の $\frac{1}{2}$ より短い。

## 3) 腹節

- a. 第4～6腹節の中央には明らかな縦凹線を有する。
- b. 第6腹節は中央で明らかな縦凹線を有する。第4, 5腹節は中央がかすかに平圧される。
- c. 第4～6腹節は、平坦で中央の凹線を欠く。

〔雌〕

## 1) 触角片状部

- a. b. 柄部とほぼ等長。
- c. 柄部より明らかに長い。

## 2) 尾節板

- a. 中央より後方で中高となり、ほとんど光沢がない。
- b. なだらかに中高となり、光沢を持つ(中央には縦にわずかな平圧部を持つものが多い)。
- c. ほとんど平坦で、光沢を持つ。

雌雄別に比較的判り易い主だった区別点となるものを掲げてみた。いずれにせよ、従来同定に利用されてきた色彩や頭楯の形態などには変異が多く、明確な区別点とはなり得ないと思われる。上記のよう

な諸点を利用すればかなりはっきりとした同定が行えるものと考えている。しかしながら、雌については各種を比較するための個体数が多少揃わないと同定が難しい。

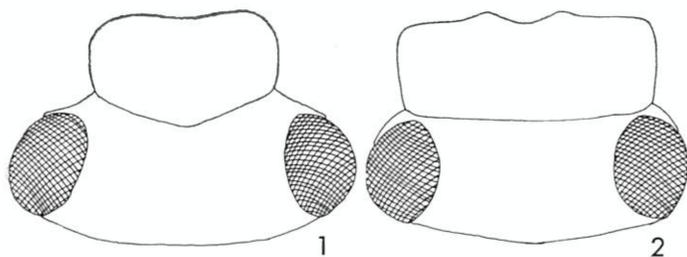
ところで、甲虫ニュース56号4頁に、石田正明氏が「台湾産 *Sericini* の産地の追加」という報文を載せられている。その中で、台湾産 *Microserica* 属に含まれる3種のコガネムシの区別点について触れ、次のように記された箇所がある。

1(2) 前胸背に暗色紋をもたない……*inornata*

2(1) 前胸背上に1対の暗色紋をもつ。時に全面暗色となる。

3(4) 頭楯前縁は丸く刻まれる……*nitidipyga*4(3) 頭楯前縁は角ばって刻まれる……*bisignata*

上記の検索表にある通り、*inornata* と他の2種を区別する根拠として、前胸背の斑紋の有無をあげている。しかしながら、筆者の手許にある南投県梅峯 (Meifeng), 南投県南山溪 (Nanshanxi), 南投県蘆山温泉 (Lushan spa) で採集された *inornata* と断定できる86個体の標本について調べてみると、そのうち11個体には、はっきりとした1対の暗色斑紋または前胸背全体に大きく広がった暗色部を有する個体が見られる。このことから石田氏のいうような区別点は、この3種を区別するポイントとしては、甚だ不適當であると言わざるを得ない。また、*nitidipyga*, *bisignata*, 両種を区別する点としてあげている文の中で「頭楯前縁は～刻まれる」という表現が見られる。これも恐らく野村氏(1974年)の *Microserica* 属の検索表にある“anterior margin of clypeus ~ emarginate”という表現を和訳されたものと推察される。もしそうだとするならば、この英文の表現は頭楯の前縁が内側に向って落ち込んだ状態あるいはえぐられた状態を示すものであり、野村氏の日本語で書かれた他の論文を読めば、このような状態については *emarginate* という語は「弯入した」という言いまわしが用いられていることが判るはずである。著者によって表現のしかたにそれぞれ特徴があり、違いが見られることは事実ではあるが、そもそも「刻みこむ」あるいは「刻みこまれる」という表現は、例えば図2の頭楯前縁に見られるような形状、すなわち中央部分においてのみえぐられた状態について使われる表現であり、このような状態については“notch”という語が用いられていることは周知の事実である。しかるに、台湾産の *Microserica* 属に含まれるコガネの頭楯前縁の形状は多少の変異があるものの、おおむね図1に示すような形をしている。図で見て明らかなように、これは中央部だけがえぐられるまたは弯入している状態ではなく、両側から全体に弯入していると考えた方が極めて自然である。このような状態は典型的な *emarginate* すなわち「弯入する」という表現を用



1. *Microserica inornata* NOMURA 2. *Adoretus coronatus* BURMEISTER

いなければならない状態である。

もし、石田氏が野村氏の検索表を和訳して「刻まれる」という語をあてたとするならば、それは大きな誤解であるといえるし、またそうではなく「刻まれる」という語を用いたとするならば、一般的な分類用語の明らかな誤用といわなければならない。いずれにせよ、石田氏のこの表現は、その種を認識しているものにとっては甚だ疑問の多い表現であるし、またその種を知らないものにとっては誤った理解を与えてしまう恐れがあるといわざるを得ない。  
(東京都練馬区)

○北海道渡島半島の食糞性コガネムシ類

函館市にお住いの長尾 康氏から、たくさんのコガネムシ類の標本をいただいた。その中に渡島(おしま)支庁・七飯(ななえ)町・仁山(にやま)の牧場で牛糞から採集された食糞性コガネムシ類が数百頭入っていた。検鏡したところ、つぎのような種を含んでいることがわかったので記録しておく。

採集年月日は1981年9月11～12日、採集者はすべて長尾 康氏である。

1. ゴホンダイコクコガネ *Copris acutidens* MOTSCHULSKY
2. ツノコガネ *Liatongus phanaeoides* (WESTWOOD)
3. マエカドコエンマコガネ *Caccobius jessoensis* HAROLD
4. シナノエンマコガネ *Onthophagus bivertex* HEYDEN
5. オオフタホシマダコガネ *Aphodius elegans* ALLIBERT
6. ヨツボシマダコガネ *A. sordidus* (FABRICIUS)
7. オオマダコガネ *A. haroldianus* BALTHASAR
8. エゾマダコガネ *A. uniformis* WATERHOUSE

一口に北海道といっても、渡島半島の甲虫相は道央や道東・道北とはかなりちがうことが予想される。今回記録した8種は、本州の東北から関東・甲信地域の山地～低地帯の牛馬の放牧場にみられる糞虫相とよく似ている。そして北海道の高地や北部のものとはややちがうようである。

この中でシナノエンマコガネは本州では中央高地に限られて分布しているようで、海外では朝鮮半島・中国東北地方および東シベリアが知られている。山地性・北方性を示す種といえる。本州中央高地産のものに対しては subsp. *minokuchianus* MATSUMURA を適用する人もあるが、仁山産の個体は本州中央高地および大陸産のものと明瞭に区別される標

徴をもっていない。

標本を恵与して下さった長尾 康氏に深くお礼を申し上げます。  
(東京都杉並区、石田正明)

○アオムネスジタマムシの琉球列島における分布記録

アオムネスジタマムシ *Chrysodema jucunda* CASTELNAU et GORY は奄美大島以南、沖縄本島、八重山諸島、台湾、フィリピンまで広く分布しているが、琉球列島の小さな島々からの報告はあまり聞かない。筆者は下記の島々において採集しているのを記録しておきたい。採集者はすべて筆者である。

3 ♀♀, 渡嘉敷島, 9. viii. 1975; 1 ♂♂, 座間味島, 15. viii. 1975; 1 ♀, 宮古諸島水納島, 29. viii. 1979; 4 ♂♂, 宮古島平良市, 31. viii. 1979.

渡嘉敷島と座間味島は慶良間列島に属し、沖縄本島西約40kmの海上に浮かぶ面積20km<sup>2</sup>に満たない島嶼である。水納島は宮古島と石垣島の間に位置する面積約2.2km<sup>2</sup>で、標高8mに過ぎない隆起サンゴ礁の島である。これらの島々では本種の食樹とされるモモタマナがよく民家の庭に植えられていて、採集は村内の路上等で行った。宮古島の個体は市内の公園の木より得た。

なお、翅鞘基部近くに鏡紋の現れる個体はなかった。  
(新潟県上越市、楠井善久)

○神奈川県におけるムネアカセンチコガネの記録

ムネアカセンチコガネ *Bolbocerosoma nigroplagiatum* WATERHOUSE の神奈川県における採集記録は少なく、筆者の知るところでは箱根仙石(平野, 1957, 神奈川虫報, No. 12: 4-7)の記録のみである。先頃、筆者は横浜市内で採集されたムネアカセンチコガネを恵与されたのでここに報告する。

1) 1 ♀, 6. vi. 1982, 横浜市中区間門町, 細川健一採集(筆者所蔵)。

2) 1 ♂, 17. vi. 1982, 横浜市瀬谷区善部町, 和田泰士採集(筆者所蔵)。

いずれも燈火に飛来したものである。

上記の地域は都市部に近いにもかかわらず横浜市内では比較的良く自然環境が保存されており、本種

の生息は横浜地区の本来の昆虫相を推察する上で非常に興味深いものと思われる。

末筆ながら本種を採集してくださった細川健一君と和田泰士君、文献を御教示いただいた石田正明先生に深く感謝する。(神奈川県海老名市、和田 薫)  
○茨城県におけるウミミズギワゴミムシの記録

ウミミズギワゴミムシ *Sakagutia marina* S. UENO は海浜性の珍しいミズギワゴミムシで、関東地方からは笠原(1977, 甲虫ニュース, No.38)による神奈川県真鶴岬における唯一頭が記録されているのみである。筆者は1970年4月7日に茨城県大洗海岸を訪れた際に多数の個体を得ることが出来たので、その際知り得た若干の知見をもあわせて報告する。

31頭, 1978年4月7日, 茨城県大洗海岸, 田尾採集  
本種は波打ち際より数メートル以上離れた砂上の石・流木・木片等の下より採集した。石下の場合多くは大きき10センチの下面がわずかに黒く湿っている程度の所より得られた。

なお本種の見られた所はすべて岩礁地帯に限られ波が直接浜辺に打ちよせるような場所にはまったく見られなかった。これは波が岩礁に当って弱められ、生息環境が他の場所より安定しているためではないかと思われる。同日、同所より2km程離れた那珂川河口付近においても採集を試みたが本種を見いだすことは出来なかった。

またこの時、砂上を歩行している個体は1頭のみであったので、その行動はかなりすばやかだったが、まだ越冬状態にあったものと思われ、広く分散する直前であったために、多数の個体を得ることが出来たものと思われる。なお他の地域でも、冬期・早春等に同種の採集を試みれば、各所で発見できるものと思われる。(神奈川県川崎市、田尾美野留)

＝＜連絡・報告＞＝

◇談話会 昨年開催されました談話会の演題および講演者は下記の通りです。

第1回例会(特別集会)昭和56年3月1日 於機械振興会館、講演: 1) 甲虫の収斂現象について一黒沢良彦(科学博物館)、2) ニューギニアのカミキリムシ一草間慶一(静岡大学)。この集会は日本鞘翅目学会と合同で行われた。第2回例会 昭和56年7月1日 於国立科学博物館。第3回例会(特別集会) 昭和56年11月15日 於機械振興会館、講演

: アリガタハネカクシおよびその近縁種の分布について一渡辺泰明(東京農大)。第4回例会 昭和56年12月20日 於国立科学博物館、講演: イギリス、ヨーロッパの博物館所蔵タイプ標本見て歩き一佐藤正孝(名古屋女子大学)。なお、談話会終了後、有志によって恒例の忘年会が「鳥正」で行われましたが、その折、会員からの寄贈文献のオークションが開かれ、売上金のすべてが本会に寄附されました。ご協力いただいた会員諸氏に心から御礼申し上げます。

◇昭和56年度会計報告

一般会計の部

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	595,705	甲虫ニュース(53号)印刷費	85,996
会費	280,500	通信・郵送費	62,430
バックナンバー売上	90,200	送金手数料	400
広告費	40,000	甲虫ニュース(54~56号)印刷費引当金	280,000
預金利子	5,836	同上郵送費引当金	50,000
寄附金	19,600	次年度繰越金	553,015
合計	1,031,841	合計	1,031,841

特別会計の部

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	220,640	次年度繰越金	380,274
甲虫目録売上	158,000		
預金利子	1,634		
合計	380,274	合計	380,274

甲虫談話会

会費(一カ年)2000円、次号は11月30日発行予定。  
発行人 黒沢良彦  
発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園  
国立科学博物館動物研究部内  
電話(364)2311、振替東京0-60664

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!  
1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)  
なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。  
〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6  
電話(03)409-6401(ムシは一ばん)  
振替 東京21129

志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000、桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,500、送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300、4個以上 ¥850(以下同様)、第2地帯 ¥1,500、¥950、第3地帯 ¥1,700、¥1,050、其他、各種器具、針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥160)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25  
電話(03)811-4547、振替 6-113479